80

誌上発表

（東寺）済世病院における従事医師の推移と診療（運営）方針の変遷

八木　高秀

東雲診療所仏教医学研究室

済世病院は，明治42年に真言宗祖風宣揚会により京都東寺境内に設立された慈善病院である．院長の小林参三郎は西洋医学と神仏への信仰により患者自身の自然治癒力を高めることを併用し，真言宗教義である「心身不二」を治療方針とした．（拙稿「済世病院院長小林参三郎の精神的治療」『密教文化』第242号 2019年）西洋医学中心の当時，小林の説く精神身体的治療論は，内外の知識者層から非常に高い評価を受けた．そのためか済世病院（以下，病院と略す）についての先行研究も小林の治療論と関連して論じられることが多く，病院に従事した他の医師達について触れられることはない．小林が急逝後，院長に就任した西谷宗雄について『六大新報』や『京都医事衛生誌』等に短い記事が掲載されたが，他の医師達の記事が書かれることはなかった．僅かに『六大新報』に掲載された病院の年賀広告が毎年全職員連名で出されており，年賀広告を出した前年の従事者氏名を知ることができる．一方，『日本杏林要覧』（明治42年）『日本医籍録』（大正14年－昭和26年）『日本医籍年鑑』（平成4年）『京都府立医科大学一覧』（昭和16年）『京都帝国大学医学部芝蘭会会報』（大正15年）他の史料に，完全ではないが年賀広告に掲載された医師達の経歴や業績が収載されている．本研究では，『六大新報』とこれら史料を照合し病院が存在した38年間に従事した医師達の推移を検討し，病院の診療（運営）方針の変遷について考察した．発表文字数に制約があるため統計的論述が主になったが，医師達個々の経歴や業績については稿を改めて論じたい．『六大新報』から確認できる病院従事医師数（医員助手を含む）は50名であるが，この内，森川賢一は西原賢一の改姓と推察され，また医員助手2名を省き，47名を調査対象とした．着任時職名別では，院長4名（小林・西谷・山田憲吉・川口英夫），顧問2名（眞下俊一・山田一夫），医員41名である．西谷は着任2年後に顧問となり同時期に医員として着任した入江栄一郎と交代した．院長5名として5人の院長時代を比較する．院長氏名（就任年・年齢・出身校）を列記すると，小林（明治42年・47歳・米国クーパー医科大），西谷（昭和2年・35歳・京大），入江（昭和4年・38歳・京大），山田（昭和8年・35歳・府立医大），川口（昭和13年・44歳・京大）である．山田が在籍した府立医大産婦人科教授は京大出身の山田一夫（病院顧問）である．小林時代に着任した医師は20名で，出身は京都医専11名・金澤医専3名・京大2名・大阪高医・岡山医専・熊本医専各1名，不明1名である．西谷時代は入江を含む4名で，京大3名・京都医専1名，入江時代は3名で，京大1名・京都医専1名（吉川舜二），慶応大1名（濱名のぼる）であるが，吉川は山田一夫の元で研究し濱名は京大で学位を授与された．山田時代は府立医大2名・京都医専1名・不明1名である．川口時代は京大6名・大阪高医・慈恵医大各1名・不明2名である．小林時代（前期）に比べ，西谷時代以降（後期）では京大の影響力が強くなっていることが分かる．前期と後期の院長以外の医師着任時年齢と従事年数（前期3名・後期5名の年齢不明者と小林時代に13年間従事した山口栞は特別で集計から除く）を比較する．前期医師の着任時年齢は28.8±4.92歳で後期は32.1±3.46歳，従事年数は前期2.0±1.17年間で後期2.6±1.27年間である．以上より，前期は短期研修的な若手医師達と共に小林独自の治療方針で病院が運営され，後期は京大人事により中堅医師達が前期よりやや長期間在籍し一般的な医療が行われたと推察される．後期は診療面では安定したが，病院本来の独自性（特殊性）は失われたのではないだろうか．